

クロスロード

11

特集

環境教育隊員に学ぶ、
活動がうまくいく
3つのポイント





子どもたちに
伝えたいSDGs

世界の学校

クリスマス会で、言語別の出し物をしました。日本語を学ぶ子たちは昔話「かざ地蔵」の劇を熱演

多様な文化が入り混じるなかで暮らす インドの子どもたちは言葉習得が得意です

しみずみき
清水美希さん(インド/日本語教育/2015年度2次隊・愛知県出身)

インドの首都・デリー南部は、経済発展が著しい地域です。富裕層や外国人が住む高級住宅街がある半面、貧しくて学校にも行けず路上で働いている子どもたちもいて、社会的格差の広がりも感じました。

そんなデリーにある私立の幼小中高一貫校で子どもたちに日本語を教えました。インドの子どもたちに加えて外国籍の生徒も多数受け入れており、外国語教育にも力を入れていました。6年生以上は日本語・フランス語・中国語・ドイツ語・ロシア語・スペイン語の6カ国語のどれかを学びます。なかでも人気だったのは日本語とドイツ語です。

インドの子どもたちは言語の習得がとて得意で、耳で聞いた言葉をまねて口に出すのが上手です。9年生で日本語を続けるかどうか選択できますが、「日本語が好き」という理由だけで何年も学習を続ける生徒たちの姿には感動しました。

インドは国土が広く、地域ごとに人々の見た目や言語、習慣が異なります。その多様性は「カレー」でもわかります。野菜だけ、肉入り、魚入り、あるいは見知らぬ食材を使っていたり、味付けも甘かったりスパイスだったり、本当に奥が深いのです。宗教上の理由でベジタリアンメニューしかないませんでした。授業で日本の巻き寿司を作ったときも、ツナや卵は使わず、大根、人参、キュウリのみで調理をしたほどです。

子どもたちには、日本語の学習を通して母国以外の国を知り、身近な日本人の振る舞いを見て日本の文化に触れ、少しでも視野の広い大人になってほしい。そうした大人が増えれば、問題を抱えている社会もおのずと変わっていくのではと思っています。

クロスロード

2021 NOV

Contents



表紙によせて

NGO南ポリビアスポーツセンターの女子サッカーチームと代表のレオナルドさん(前列右から2人目)です。女子サッカーは練習環境が整っていませんが、選手たちは練習を楽しみに遠方からも集まります。この日は引越してチームを去る選手の最後の練習日。直前に奇跡的に雨がやみ、ウユ二塩湖に負けにくい「鏡張り」のグラウンドで記念写真が撮れました。森下徳頭さん(ポリビア/サッカー/2016年度3次隊・千葉県出身)※後列右から3人目

- 2 子どもたちに伝えたいSDGs ―世界の学校
- 3 ■Contents ■索引
- 4 JICA Volunteers' Reports
- 特集
- 6 環境教育隊員に学ぶ、活動がうまくいく3つのポイント
▶顔を売る ▶ニーズを引き出す ▶やってみよう
- 14 派遣国の横顔 スリランカ
～知っていますか?派遣地域の歴史とこれから
- 20 専門家に聞きました!
失敗に学ぶ ～現地で役立つ人間関係のコツ
- 22 この職種の先輩隊員に注目! ～現場で見つけた仕事図鑑
- 24 あって良かったモノ
- 25 あの日、地球の、あの場所で。
- 26 先輩隊員のシューカツ記
- 28 派遣から始まる未来
進学、非営利団体入職や起業の道を選んだ先輩隊員
- 30 待ってます、あなたを! ～各界からのエール
- 31 ウチのこだわり ―OB・OGショップ 国内編
- 32 JICA海外協力隊派遣現況
- 33 INFORMATION ～JICA青年海外協力隊事務局からのお知らせ～
- 34 隊員めし 現地で作った日本食、日本で作る現地めし
- 36 ウチのこだわり ―OB・OGショップ 海外編

■国別索引	掲載ページ
インド	2
ウガンダ	9
エクアドル	10
ガーナ	21 23
ガボン	26
サモア	34
スリランカ	16 17 18
セルビア	22
タンザニア	28
中華人民共和国	4
パラグアイ	31
バングラデシュ	36
東ティモール	25
フィリピン	5
ポリビア	1
マラウイ	20
ミクロネシア	8
ルワンダ	22 24
ヨルダン	7

■職種別索引	掲載ページ
コミュニティ開発	5 26 28
野菜	31 36
マーケティング	24
理数科教師	21
青少年活動	20
環境教育	7 8 9 10
野球	4 16
サッカー	1
空手道	22
PCインストラクター	23
音楽	17
日本語教育	2
体育	25
小学校教育	34
幼稚園教諭	18

※職種別索引の職種名は、JICA海外協力隊(経験者含む)の派遣時の名称を記載しています。

■出身都道府県別索引	掲載ページ
北海道	17
青森県	10
福島県	9 36
千葉県	1
東京都	8 18 31
長野県	25
神奈川県	21 24
愛知県	2 7
大阪府	16
兵庫県	22
和歌山県	34
岡山県	23
広島県	28
福岡県	26
佐賀県	4
大分県	5

【凡例】

JICA海外協力隊の隊員(経験者を含む)については、次のように表記しています。

国際協力子さん(ケニア/環境教育/2019年度1次隊)			
氏名	派遣国	職種	隊次

「JICA海外協力隊」には「青年海外協力隊」「海外協力隊」「シニア海外協力隊」「日系社会青年海外協力隊」「日系社会海外協力隊」「日系社会シニア海外協力隊」があります。

『クロスロード』(通常号)は、JICA海外協力隊が活動・生活を円滑に行うための実践的な情報、および帰国後の進路開拓や社会還元をする際の情報を提供する雑誌で、年に10回発行しています。

編集・発行:
独立行政法人国際協力機構 青年海外協力隊事務局

from Japan



少数派の在住外国人に 災害情報を多言語で発信

山路健造さん (フィリピン/コミュニティ開発/2014年度2次隊・大分県出身)

私が代表を務める市民活動団体「サワディー佐賀」は、佐賀県内に住むタイ人同士の交流を支援しようと始めた、留学生やタイが好きの人によるネットワークです。岩永と同じく、私も勤務しているNPO法人「地球市民の会」(4ページ参照)の国内事業から派生して、2018年に設立しました。メンバーは約60人で、日タイの比率はほぼ同じです。県在住のタイ人は約80人ですから、半数近いタイ人が参加していることになりました。

料理や語学教室への参加といった文化を通じた交流をはじめ、ロケをしたタイ映画のヒットでタイ人観光客に大人気の祐徳稲荷神社(佐賀県鹿島市)でのボランティアガイドなどを行ってきました。

一方で19年8月に起きた九州豪雨災害の反省から、タイ語で災害情報の発信を行うようになりました。

気象警報や避難情報などが発生したら、①外国人にもわかるよう平易な表現やひらがなを使ったやさしい日本語に書き換える、②タイ語へ翻訳、③複数のタイ人で内容チェック、④LINEグループやフェイスブック、ツイッターに投稿、という流れで発信する。これをサワディー佐賀のメンバー内で行った翻訳チームで行っています。

当初、災害情報をGoogle翻訳でタイ語にしたのですが、伝えられる内容に限界がありました。そこで日本の災害や避難方法について知らないタイ人にもわかりやすく迅速に発信できる体制を整えました。

その他にも県内には7000人を超す外国人が住んでいます。災害時に佐賀県では使用人数の多い言語である英語、ベトナム語、中国語、インドネシア語、韓国語、タガログ語、ネパール語による情報を出しますが、少数派のタイ、ミャンマー、スリランカの人々に向けたものではありませんでした。そこで、21年8月に起こった豪雨災害では、タイ語の情報発信モデルを応用し、ビルマ語、シンハラ語による情報発信も始めました。

また、岩永が共同代表を務める佐賀災害支援プラットフォームの活動として、ベトナムとフィリピンの技能実習生を中心とするグループに対して、母語での情報提供をしています。新型コロナウイルス感染症についての情報も佐賀県国際交流協会に提供して複数言語で行いました。

災害時は特に母語で情報が伝われば安心感につながりますし、「あなたのことを忘れていませんよ」という私たち日本人からのメッセージにもなります。「いずれは在住外国人すべての母語で発信できたらいいね」と、関係者で話しています。



3 東京2020パラリンピックに向け、19年に合宿したタイのパラ・アーチェリーチームをおもてなしした

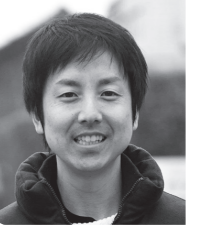


4 タイフェスティバル、タイ料理教室などを通して、国内外のタイ人と交流を図ってきた。こうした一連の活動が地域活性化に貢献したとして、20年度「ふるさとづくり大賞」で団体表彰(総務大臣表彰)を受賞した

サワディー佐賀がフェイスブックで発信した災害情報。タイ語とやさしい日本語で表記している



from Japan



県内外55団体で災害支援を円滑に行う コーディネートをしています

岩永清邦さん (中華人民共和国/野球/2006年度3次隊・佐賀県出身)

「佐賀災害支援プラットフォーム(SPF)」は、佐賀県内外の被災地を支援したい人・団体が、情報交換や協力をスムーズに行えるよう調整・支援する組織です。賛同する県内外55の民間団体で構成しており、私が事務局長を務める認定NPO法人「地球市民の会」が共同代表をしています。

SPFは、東日本大震災の被災地支援の際に始まった県内外のボランティア団体のつながりを、地元の佐賀にも生かそうと2018年に設立されました。佐賀県や市町と連携協定を結んで協働し、平時から災害時に備えています。

21年8月に起きた豪雨災害直後には、県や被災した市町、社会福祉協議会、被災地入りしたSPF、県外の支援団体と情報を共有するオンライン会議を約2週間毎日開催しました。これにより被災状況や支援ニーズを集めるとともに、それぞれが提供可能な物資や人材、資金などを確認してマッチングを行い、災害初期の段階から各団体が効率的に活動を始められるようにしました。

生活物資の提供、浸水した家屋の片付けや乾燥、車の貸し出し、障害者や外国人への支援、被災者の心のケアなども行っています。被災地のニーズは幅広く、行政の力だけではカバーしきれません。SPFは各団体の強

みを生かしてそれを補完しようとしています。

また、専門的な技術・知識を持った県外の団体による協力も大切です。コロナ禍でも住民、支援団体双方が安心して復旧・復興を進められるよう、現地入りする全員のPCR検査の実施や団体登録を済ませてから活動してもらうなどのガイドラインを導入しました。

情報共有会議だけではどうしても支援の漏れや遅れが生じます。それを少しでもなくすため、SPFのウェブサイトに「現場で求められている支援・物資掲示板」と「支援申し出掲示板(専門団体、物資)」を設け、そこでマッチングできるようにしました。

私は青年海外協力隊の任期終了後、地元の佐賀に貢献したいと、国際協力とともに地域おこしにも力を入れている地球市民の会に就職しました。

被災地支援は、住民の困っていることを聞き取り、支援の内容や方法を考え、利害関係者間を調整し、住民の困り事がなくなるまで続けていく活動ですので、それぞれと密なコミュニケーションで向き合うことが重要です。任地で一から人間関係をつくり、状況に合わせて柔軟に活動する協力隊の経験が生きる現場だと感じています。

佐賀災害支援プラットフォームのウェブサイトの「現場で求められている支援・物資掲示板」にある「支援申し出掲示板(専門団体、物資)」では、具体的な内容やそれぞれの進捗状況も把握できる



1 佐賀災害支援プラットフォームの活動から、土石流で被害を受けた佐賀市大和町名尾の和紙工房「名尾手すき和紙」での災害支援(2021年8月) 2 地球市民の会の活動から、「子どもの居場所づくり事業」で外遊びをする子どもたち。月1回、地域で子どもたちが自由に遊べる場をつくっている





教える人
 公益社団法人
 日本環境教育フォーラム事務局長
 かとうたつひろ
加藤超大さん
 ヨルダン/環境教育/
 2012年度1次隊

PROFILE

愛知県出身。上海の高校への留学をきっかけに環境問題に興味を持ち、大学では環境教育学を学ぶ。卒業後、ヨルダンへの協力隊派遣を経て2014年に日本環境教育フォーラム入社。19年より現職。青年海外協力隊環境教育OV会会長も務める。

「貧困をなくそう」「すべての人に健康と福祉を」をはじめとしたSDGs

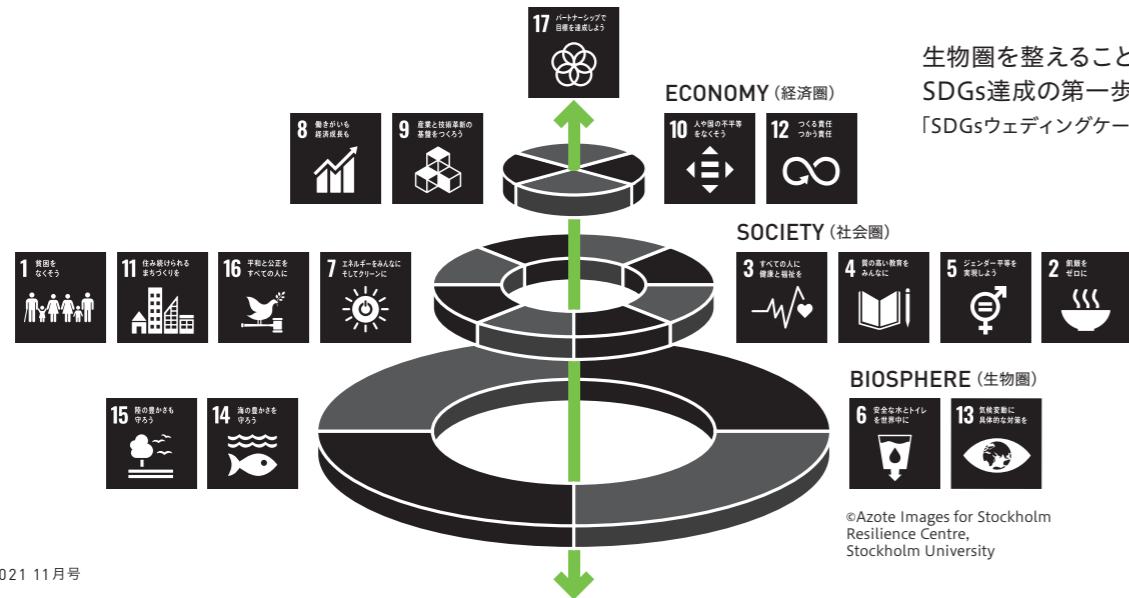
「安全な水とトイレを世界中に」「気候変動に具体的な対策を」「海の豊かさを守ろう」「陸の豊かさを守ろう」の4つです。これだけでも、環境問題が「生物圏」に大きく関わっていることがわかってきます。

もし、ケーキの土台となる「生物圏」のスポンジがスカスカだったら、上の「社会圏」と「経済圏」も倒れてしまうでしょう。つまり、土台を整えるためにまずは「生物圏」の環境問題に目を向ける必要があります。

「人づくり」の側面があります。最終的なゴールは、実際に環境に負荷をかけない生活をするための行動を起こし、でもらうことにあります。

「SDGsウェディングケーキモデル」の目標を達成していかないと、その上の「経済圏」の層は成り立ちません。協力隊が担っている活動は、「経済圏」「社会圏」も含めて、SDGsの目標に該当しているものがほとんどだと思います。どれも持続可能な社会を実現するために欠かせない目標ですが、まずは「生物圏」という土台を強固なものにしていくために、すべての職種で環境要素を活動に盛り込んでいく必要があると思います。

生物圏を整えることがSDGs達成の第一歩「SDGsウェディングケーキモデル」



©Azote Images for Stockholm Resilience Centre, Stockholm University

なぜ、今「環境」を取り入れるべきなのか

はじめに、環境教育職種隊員の事前研修を担当する、日本環境教育フォーラム事務局長の加藤超大さんに、環境教育活動の必要性をお話しいただいた。



特集

環境教育隊員に学ぶ、活動がうまくいく

3つのポイント

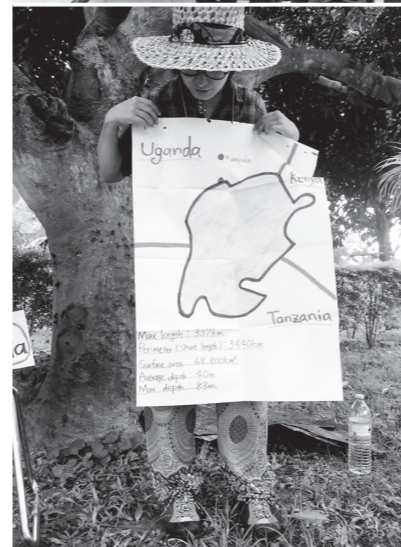
- ▼ 顔を売る
- ▼ ニーズを引き出す
- ▼ やってもらう



温暖化、海洋汚染、大気汚染など、環境問題は地球規模で深刻化し続け、先進国だけでなく途上国でも取り組みなければならない課題になっている。協力隊要件があるどの分野にも関わりがあり、他人事ではない。

環境問題を改善する活動のなかで大きな壁となるのが、人々の習慣や生活様式を変えることだ。過去の本誌環境教育特集を開いても、「同僚たちに活動への関心を持ってもらえない」「行動が変わったという手応えを得られない」といった、先輩隊員たちの嘆きや落ち込みの声が並んでいる。

しかし逆の見方をすると、環境教育職種で成果を残した先輩隊員に学べば、環境問題対策だけでなく、あらゆる職種で使える「活動がうまくいく」ポイントが導き出せるのではないのか。この特集はそのような発想からスタートした。「取り組み方がわからない」「活動がうまくいかない」、そう感じて行き詰ったときにも活用してほしい。





いちかわまさみ
市川雅美さん

ウガンダ / 環境教育 /
2017年度2次隊

PROFILE

福島県出身。小学生の頃から水生生物や動物に興味があり、大学で野生動物や自然環境の研究を行う。卒業後、屋久島のエコツアーガイドをしたり、山梨県でネイチャーガイドのスキルを学んだ後、ワーキングホリデーでニュージーランドへ。帰国後、協力隊に参加。

配属先:ウガンダ・コミュニティ・ツーリズム協会

要請内容:湿地資源を活用した観光プログラム推進、地域の生徒を対象にした環境教育プログラムの企画・実施



収入向上



観光事業促進

- 1 観光客が多いマーケットに出店し、商品を販売した
- 2 オリジナルの観光プランを紹介したリーフレット
- 3 地元の幼稚園や小中高校で月に1回、環境教育のワークショップを継続して行った

まえかわけんいち
前川健一さん
ミクロネシア / 環境教育 /
2011年度1次隊

PROFILE

東京都出身。大学卒業後、八王子市役所に入所し、ごみ減量対策課に勤務。社会人大学院で環境マネジメントを学んだ後、6年目を迎えた27歳のときに協力隊に現職参加し、ミクロネシアへ。帰国後、市役所勤務を続けながらもJICA章の根技術協力事業を通して同国のゴミ問題にかかわった。

配属先:チュウク州政府環境保護局
要請内容:ゴミの分別、収集方法の改善などを含めた廃棄物管理システムの構築と地域住民への環境啓発活動

- 1 ゴミ収集車は対象地域に入ると、ハザードランプをつけながら徐行し、クラクションを鳴らして到着を知らせる。同時にアシスタントと前川さんは、収集車の後ろを歩きながら、地域住民にチュウク語で呼びかけを行った
- 2 現職参加した前川さんは、八王子市役所向けに活動の様子を紹介した「ミクロネシア通信」を作成していた



活動の広げ方

環境要素を活動に取り入れるといても、その範囲は幅広い。そこでまず3人の環境教育OVの活動を紹介します。

Case 2 ニーズをくんで それぞれが満足する活動を並行して行う

日本でネイチャーガイドをしていた市川雅美さんの配属先は、首都・カンパラにあるNGO「ウガンダ・コミュニティ・ツーリズム協会」(以下、UCOTA)だった。活動先はUCOTAが支援する「ベータ」だった。ベータはルテンベ・デヴェ村を拠点に活動するNGOで、メンバーはルテンベの地域住民だ。地域には世界で3番目に大きな湖であるビクトリア湖があり、湖畔の湿地には400種以上の野鳥が生息していることから、ラムサール条約に指定されている。このルテンベの湿地保護活動を推進しながら観光業を盛り上げたいUCOTAに対し、ベータでは地域住民の環境問題への意識は低く、メンバーのいざばんの希望は収入向上だった。

「ルテンベの湿地帯は観光のポテンシャルは高いのですが、ポイ捨てされたゴミが浮いていたり、ネイチャーガイドの経験不足や知識不足も感じられ、課題は多岐にわたっていました」
地域が持続可能に発展していくためには、地域住民に対する環境教育も必要と考えた市川さんは、2つのNGOの要望も取り入れ、「観光事業促進」「環境教育」「収入向上」の3つを並行して進めることにした。

「観光事業促進」では、伝統的漁法や村の暮らしについて聞き取り調査を行

Case 1 何をすれば、人々が行動変容を 起こしやすいかを見極め、実行する

八王子市役所でゴミ減量の仕事をしていた前川健一さんが、現職参加で向かったのはミクロネシアだ。チュウク州ウエノ島にある環境保護局でゴミ収集の活動にあたった。島では公共の場にゴミが平然と捨てられ、前任者やJICA専門家らが整備したゴミの埋立地までの小道にもゴミが山積み。浜辺もゴミ捨て場と化していた。

「島にはボロボロのゴミ収集車が1台しかなく、収集車が回収に行けるのは一部の商業地区のみ。ただし翌年、日本からゴミ収集車2台の寄贈が決まっていたので、収集車で島のゴミを効率的に集めて埋立地に運ぶことを定着させれば、住民が公共の場にゴミをポイ捨てることはなくなると思いました」

そこで前川さんは、カウンタパーに二年間の計画を立ててもらい、自分分は島のゴミ収集の現状を知ろうと、収集車に同乗して各村を回り、近隣の州で行われたJICA専門家による調査に同行させてもらった。

加えて地元NGOと連携。「文字が読めない住民も多いため、現地語が話せるNGOのスタッフに各家庭を回ってもらい、聞き取り調査を行いました」。

調査内容は、世帯人数、ゴミの量、誰がゴミ捨てをしているか、掃除やゴミに対しての考え方などだ。すると多くの世帯で室内を掃除した後、ゴミを外に捨てていることがわかった。

そこで前川さんは「住民参加型の持続可能なゴミ処理システムの定着」という目標を定めてワークショップを行い、住民に具体的なごみの捨て方やメリットを伝えることにした。

「ゴミは家にとってありがたい、週に2回収集車が来たらゴミを持って外に出る。住民には収集車がゴミを埋立地まで運ぶので、自分たちでわざわざ浜辺などに捨てに行かなくていいし、島も海も汚れないことを伝えました」

それまでに前川さんはゴミ収集車に乗って顔を売り、同僚や島の人々と信頼関係を築いてきた。住民にゴミをポイ捨てしていることへの罪悪感があったことも幸いし、ワークショップは大成功。島の人々は口々に「協力するよ!」と盛り上がりが出てくれた。

ところが、初のゴミ収集日、約2時間で回収できたゴミは数袋。「収集日を忘れていた人や、車が来たのがわからなかった人もいたようです」。

その問題を解決するため、収集車はクラクションを鳴らして到着を知らせる「ホーンコレクション」を採用し、チラシを配ったところ、徐々にゴミ回収量は増加。前川さんの計画性と周囲を巻き込んだ現地調査が功を奏し、回収エリアも島の約6割まで広がった。

先輩隊員が伝授！
「行き詰まったときの対処法」

「すべき」をやめてマインドリセット

→「課題を自分で見つけ、自分で活動内容を考える」ことに戸惑い、当初はなにをやってもうまくいきませんでした。やってよかったのは「マインドリセット」です。まず「自分は毎日環境にいいことをしている」と誇りを持ちます。そして挫折するのは期待を裏切られた時でその期待値を設定しているのは自分なので、目標設定をし直しました。「自分はこうあるべき、こうすべき」という考えを捨て、「自分が楽しいと思える活動」に切り替えました。活動先の役場を飛び出し、教育施設を訪ねたり、地元の人々と話をして存在を知ってもらうことから始めたところ、口コミで私の存在が知られるようになり、物事が好転しました。

任地の人たちが必要性を感じづらい環境教育の現場では、活動方法や自分の存在意義に悩む人も多いだろう。そこで「青年海外協力隊環境教育OV会」の皆さんにアンケートを実施。克服法を教えてもらった。

※フィリピン・元会長さん、ベリース・木村さん、エジプト・しゅわわさん、ヨルダン・平間さん、コロンビア・アルボさん、スーダン・ハアラさんの回答を加工編集しています。

仲間に聞いてもらう

→結果を残そうと活動を急いだ結果、人間関係のトラブルが続いてしまいました。挫折しそうなときは活動先でできた友人や配属先と同僚、同期の隊員と話すことで大いに救われました。

インセンティブでやる気アップ

→大学でリサイクルシステムの構築と運用や、ゴミ関連の啓発活動を行いました。ペットボトルのリサイクルにあたり、ごみ袋1袋分集めるといくらというようにインセンティブ付与を行うことにしたところ、多くの方が協力してくれるようになり、継続的に多くのペットボトルを集めることができました。インセンティブの内容は現地の人の意見を聞くことが大切ですが、これがあるとより多くの人を巻き込めるといいます。



活動エリアを変えて視点を変える

→活動当初は語学力不足もあいまって、周囲の協力を得にくい状況が続きました。自分がやりたい活動の目的や相手にとっての利益を伝える準備をしておけば、独りよがりにならずに早くから活動の理解者や協力者を得られたと思います。行き詰まったときは、今まで足を踏み入れたことのない場所に行ったり、新たな部署や団体を訪問したり、違う活動を取り入れてみたりと環境や行動を変えるよう意識したところ、視点が変わって道が開けました。

先進国の責任を再認識する

→任地の方々の環境問題への理解が乏しく、周囲の協力が得られないと感じたときには「活動先である途上国の方が圧倒的に環境負荷が少ない生活をしていて、地球規模では私たち先進国が負荷をかけている。今後途上国が同じような状況にならないように願っている」と考えて活動するよう心がけました。

子どもたちの笑顔が励みに

→もっと任地の人に共感し、褒めて認める関わりをすればよかったという反省があります。うまくいったのは、小学校で同僚と行った寸劇です。登場人物の中で環境に悪いことをしている人を探してもらい、その後、「じゃあ、何をどう変えたいだろうか？」と質問をしました。環境問題もこうした寸劇にすることで子どもたちがアクティビティとして楽しんでくれます。彼らの笑顔が励みになりました。

複数の活動が心の支えに

→複数の活動を同時並行で行うことで、少しでも進んでいる活動があれば、メインの活動がうまくいかない時期も前向きな気持ちになりました。

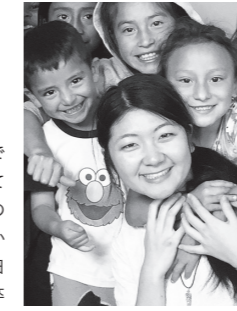
人物相関図で人間関係を整理

→「味方」をたくさんつくるためには、相手の状況を把握することが必須です。そこで私はドラマのキャスト相関図のように関係する人たちの上司部下の関係・対立関係などを書き込み、視覚化しました。そうすることでそれぞれの人たちの興味関心や困っていること、求めていることが明確になり、自分の活動の目的や意義をあらためて整理することができました。

ホワイトボードでコミュニケーションが円滑に

→私は常に携帯用のホワイトボードを持ち歩き、伝えたいことを文字やビジュアルにして示しました。相手にもボードに書き込んでもらえるので、自分も理解しやすく意思疎通に役立ちました。環境教育は対象者への教育以前に学習ツールを用意したり、活動場所を選定したりと、やるべきことがたくさんあります。たくさんの人をお願いをするときにホワイトボードはお薦めです。

さんのへあきひ
三戸朝陽さん
エクアドル / 環境教育 /
2017年度1次隊

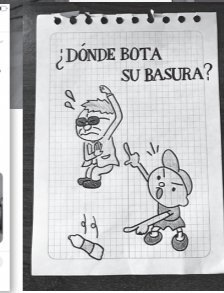


PROFILE

青森県出身。中高生時代から「地方でも外国人と交流をしたい」と強く考えていたため、大学時代にインドネシアのスタディツアーに参加。それをきっかけに大学を休学し、インドネシアで日本語教育のボランティアを行う。新卒で協力隊に参加。

配属先: グアランダ市役所

要請内容: 市役所環境管理課職員と協力し、ゴミ分別啓発活動や小中高等学校での環境教育活動の実施



①環境教育番組を作ったテレビ局で。出演者3人と環境課の職員(左端が三戸さん)
②活動初期に描いた手書きポスター
③学童保育所での授業やテレビ番組の様子を、積極的にSNSで発信した

テレビ番組やSNSなど、
メディアを活用

Case
3

学生時代から国際交流活動や社会貢献活動を続けてきた三戸朝陽さん。協力隊での配属先は、エクアドル中部にあるグアランダ市役所。ゴミの分別や減量、節水や自然保全などに関して、市内の小中高校などで教育活動を行うことが求められていた。

「市のゴミの大部分が埋め立てのため、土地確保が難しくなっていました。まずはゴミの総量を減らすこと、リサイクルが必須でした。ゴミの分別は公共施設では行われていましたが、一般家庭には普及していませんでした」

グアランダ市は人口約9万人の小都市で、市民の生活水準は高く、日々の暮らしには不自由を感じないくらいに発展している。ここでいかに多くの人に情報を伝え、環境に対する意識を高めようかとも三戸さんの課題だった。

着任当初は言葉の壁があり、人脈もない。しかし三戸さんが描いたポイ捨て禁止などのイラストが同僚らの目に留まり、3か月後には市内5か所の学童保育所で未就学児や小学校低学年の子どもたちに向け、環境教育の授業を担当することになったという。

「授業回数の多い保育所では道徳的なテーマも盛り込みました。掃除の人がいるのになぜゴミをポイ捨てしてはいけないのかわからないという子もいたからです。道徳教育で動植物をいたわ

る心を育んだり、清掃をしてくれる方をはじめ、他者に対する尊敬の大切さを伝えることで、環境問題への理解につながると考えたんです」

毎日30分〜1時間の授業では、子どもたちが飽きないように、アニメのキャラクターを主人公にした環境問題の資料を作成した。それをプロジェクトで上映し、読み聞かせを行うと、未就学児でも授業を楽しみにしてくれるようになり、教室内のゴミが徐々に減った。

こうした三戸さんの活動は「外国人女性がおもしろい環境教育をしている」と話題になり、地元のテレビ局のインタビューを受けることになる。それがきっかけとなり、同時期にボランティア活動をしていたドイツ人や同僚らと、環境教育のテレビ番組の制作に携わることにつながった。

「企画だけでなくレポーターとしても出演しました。番組は2、3週間に1度の頻度で放送されていたのですが、毎回テーマを変え、ゴミ埋立地付近の汚染された川の様子を紹介や、捨てられた犬や猫の保護施設長へのインタビューなど、さまざまな課題を伝えました」。テレビ番組の放送があると、SNSでも拡散した。メディアを活用することで、三戸さんは広範囲の住民に環境問題を考えるきっかけを与えることができた。

ウガンダの市川さんはネイチャーガイドとしての専門知識を持っているにもかかわらず、各団体をつなぐコーディネーターとしてうまく立ち回りました。各活動でかわっているメンバーの得意分野を見極め、リーダーになってもう一つ、市川さん自身が動くのではなく、住民主体の環境活動を促した好例だと思います。

CPや住民たちの「やってみようかな」という気持ちをもっと引き出し、モチベーションを維持させるべく、活動先の人々が主役となる活動を心がけましょう。

Point 3 やってもらう

環境教育は即効性よりもじわじわと効果を感じられる漢方薬のようなものです。2年という短期間で人の行動を変えるのは簡単ではありません。自分の任期が終わったあとも続く活動を目指すには、協力隊員がすべて行うのではなく、任地の人も任せられることが大切です。

ミクロネシアの前川さんは、自ら現場の状況を確認しながらも、2年間の計画はCPに立ててもらい、また周囲のやる気のあるメンバーを探して、皆で活動を広げてくださいました。

Point 1

顔を売る

任地の問題を見つけ、活動内容や場所を自分で探すことも多い環境教育職種では、人脈づくりが活動の基本です。そのためにも、多くの人に自分をアピールして覚えてもらいましょう。

ミクロネシアの前川さんは、地元NGOとの調査で各家庭を訪問するだけでなく、調査後の活動でも自らゴミ収集車に乗って広報活動をするなど、足で稼いで日本から来た自分を印象づけました。小さな島での活動を円滑に行うために有効だったと思います。三戸さんのエクアドルでのテレビ出演は、顔を売るわかりやすい例ですね。任地の人口規模が大きい場合には、マスメディアの活用も効果的です。今はSNSもどんどん活用することで、幅広い年齢層に届きます。

環境教育は即効性のあるメリットが伝わりにくい活動です。現地になじみのない外国人が地域の人々の生活を変えるような話をするには、前段階として信頼関係が不可欠です。まずは地元で溶け込むこと。自分の顔を売り、カウンターパート（以下、CP）や関連団体、地域住民、子どもたちとの信頼関係を築きましょう。



活動を成功に導く 3つのポイント

3人のOVの活動やアンケート結果から見えてきた「活動を成功させるポイント」を3つにまとめ、前出の加藤さんにコメントをいただいた。環境教育に限らずあなたの活動にもぜひ取り入れてみてほしい。



Point 3 やってもらう

例 収入向上のための商品作りは、得意とする人にリーダーになってもらい、市川さんはコーディネーターを担う

Point 2 ニーズを引き出す

例 前川さんは現地語が話せるNGOの人たちと現地調査やワークショップを行った

Point 1 顔を売る

例 テレビ番組に出たことで、三戸さんは地元の人気者になった

Point 2

ニーズを引き出す

同じ国や地域でも、かわる人によってニーズは変わります。

前川さんがミクロネシアでの活動を成功させたのは、事前にゴミ収集車寄贈後の計画をしっかりと立てていただけでなく、CPや地域の人と向き合い、地域を徹底的に調査して現場の問題点やニーズをしっかりと把握したことにあります。

ウガンダの市川さんは活動先では環境教育を行うことが不可欠と感じながらも、2つの団体それぞれの希望も取り入れ、3つの活動を進めました。その根底には、同じウガンダ人でも組織が違えば置かれている状況も違い、ニーズが異なることを早々に見極めたことがあるのだと思います。

エクアドルの三戸さんも対象年齢によって授業内容のニーズが異なることに気づき、教材を使い分けました。テレビ番組では、環境問題を深掘りするというより、毎回異なるテーマを取り上げました。まずは住民に広く環境問題に興味を持ってもらいたいという配属先のニーズにも応えるためです。こちらの希望を一方的に伝えるだけでは周囲は協力してくれません。地域のニーズに合わせながら柔軟に活動を進めていきましょう。

3つのポイントを意識して 活動に環境要素を取り入れよう

特集冒頭でお伝えした通り、途上国の人々にも環境問題を「いますぐにでも解決すべき課題」として捉えてもらわなければならない時代にきています。私はヨルダンでの隊員時代、小中学校を管轄する文化芸術活動課に配属され、最初に各学校を巡回しましたが、いずれも環境教育の優先順位はかなり低い状況でした。2年間の活動を通して最終的には生徒たちの行動が変わったと実感を持つことができましたが、それが環境問題の解決にどうつながったかまではまだ見えていません。

しかし数年たった今、大人になりつつあるあの子たちが環境問題を少しでも解決するために行動を起こし、それを次世代の子どもたちに伝えているかもしれない。それを信じて、種をまき続けることが大事だと思います。

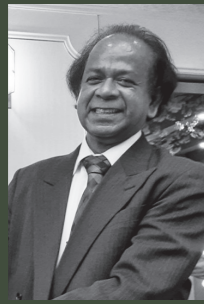
特集に登場した3人のOVの活動は、計画・行政分野、商業・観光分野、公共・公益事業分野、人的資源分野などにも関わります。あなたの活動に環境要素を盛り込むなら、どんな活動が考えられますか。考え方や活動内容を変えることで、物事が好転した隊員は少なくありません。3つのポイントを意識しながら、ぜひ活動に環境要素を取り入れてみてください。

／ お話を伺ったのは ／

アーナンダ・クマールさん
Ananda Kumara

PROFILE

スリランカ出身の名城大学外国語学部初代学部長で、現在同大学名誉教授（専門は国際開発や開発経済学など）。在日本スリランカ人研究者協会副会長。1983年に国費留学生として東京工業大学に留学して以降、日本国内の国連機関の研究者や大学教授として勤務。これまでにODA評価スリランカ国別評価チームアドバイザー（2013年）、三重県協力隊を育てる会会長（10-14年）をはじめ、さまざまな社会連携活動に従事し、第16回JICA理事長表彰を受賞。今後はスリランカ初となる日系の大学設立に従事、人材育成に励む。



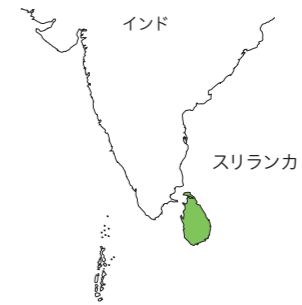
スリランカの重要な輸出品の一つである紅茶は、イギリスによる植民地時代にプランテーションとして始まった

派遣国の横顔

知っていますか？ 派遣地域の歴史とこれから 〈スリランカ〉

40年前に4カ国目の協力隊派遣国として派遣が始まったスリランカ。2022年には日本との国交樹立70周年を迎えます。スリランカの大まかな歴史や文化、協力隊事業について振り返ります。

スリランカの基礎知識



スリランカ
 面積：6万5,610平方キロメートル（北海道の約0.8倍）
 人口：2,103万人（2016年）
 首都：スリ・ジャヤワルダナプラ・コッテ
 民族：シンハラ人（74.9%）、タミル人（15.3%）、スリランカ・ムーア人（9.3%）（一部地域を除く）
 言語：公用語（シンハラ語、タミル語）、連結語（英語）
 宗教：仏教徒（70.1%）、ヒンドゥ教徒（12.6%）、イスラム教徒（9.7%）、キリスト教徒（7.6%）（一部地域を除く）
 ※2021年7月2日現在
 出典：外務省ホームページ
 (https://www.mofa.go.jp/mofaj/area/srilanka/index.html)

派遣実績
 派遣締結日：1980年5月15日
 派遣締結地：コロンボ
 派遣開始：1981年4月
 派遣隊員累計：1,151人
 ※2021年9月30日現在
 出典：国際協力機構(JICA)

長期間にわたる内戦、相次ぐ災害を経て、経済発展を続ける「インド洋の真珠」
植民地支配からの独立、内戦復興、災害復興と、スリランカの歴史を知ると協力隊に求められる要請の真意も見えてくる。スリランカと日本の国際協力の懸け橋として教壇に立つアーナンダ・クマール名誉教授に、まずはスリランカの歴史や文化についてお話しいただいた。



平均識字率は9割を超えるスリランカ。幼児、体育、美術、音楽といった教育関連の要請も多い

今年、協力隊派遣40周年を迎えたスリランカ民主主義共和国（以下、スリランカ）。1981年4月の4次隊3名（野菜、手工芸、竹工芸）の派遣を皮切りに、農業・保守操作部門を中心に派遣数を伸ばし、派遣隊員数は累計1000名を超えている。
インド洋の真珠とも呼ばれるスリランカは、インド南東部のインド洋上に浮かぶ熱帯の島国だ。紀元前から仏教国として栄え、「アヌラーダプラ遺跡群」など8つの世界遺産でも知られる。19世紀初頭に英国植民地になったが、48年に英連邦の自治領として独立。72年には完全独立を果たした。

主要産業は農業で、セイロン紅茶をはじめ、天然ゴム、ココナツ、コメなど、熱帯モンスーン気候を生かした多彩な農作物を産出している。また、サファイアやルビーなど、世界有数の宝石産出国でもある。スリランカは北海道の約8割の国土に複数の民族が暮らす多民族国家だ。人口約2000万人の内、7割強をシンハラ人、2割弱をタミル人が占めているが、過去には両民族の対立から不幸な内戦を経験した。

内戦終結後は東部州への隊員派遣を再開。北部州への派遣も開始され、内戦後の民族融和にもかかわってきた。スリランカ出身で「三重県協力隊を育てる会」初代会長を務めるなど、協力隊との縁が深いアーナンダ・クマール名城大学名誉教授は、「政府の融和政策や教育が進んだため、特に過去の確執がない若い世代の間では、両民族の相互理解・交流が深まっています。そのなかで、中立の立場で話ができる協力隊員の果たす役割は大きいはずです」と話す。

平均識字率が9割を超えるスリランカは教育水準が高く、内戦終結に伴う国内情勢の安定を背景に、近年、経済発展が進んでいる。「平和」を礎にしたさらなる発展が期待されるなか、引き続き協力隊の活動が求められている。

はやし かな
林加菜さん

音楽 / 2014年度1次隊・北海道出身

PROFILE

大学卒業後、民間企業勤務を経て、2014年に協力隊に参加。中学から社会人まで吹奏楽を続けてきた経験を生かし、音楽隊員としてスリランカのNGO団体で子どもたちへの音楽指導に尽力した。帰国後は5年間、JICA北海道センター(帯広)にて市民参加事業担当として勤務。



音楽を通し、子どもたちの心のケアを行った林さん。活動先のNGOでは、シンハラ人とタミル人が参加する交流合宿も行った



拾ってきた丸太をプレートに見立ててピッチング指導。野球道具が不足していたため、植田さんは勤務先だった明徳義塾中などに中古道具の支援を募った



うえだ かずひさ
植田一久さん

野球 / 2002年度1次隊・大阪府出身

PROFILE

日本・スリランカ野球友好協会理事長。2016年に同団体を設立。明徳義塾高等学校での勤務時代には野球部副部長として甲子園を何度も経験。02年に協力隊に参加し、監督としてチームをアテネ五輪予選出場に導いた。帰国後は地元大阪で学習塾を開塾し、子どもたちの夢を後押ししている。

民族融和を図り、
人を育てる

長期にわたって続いた紛争後の平和復興には、少なからず協力隊員らの活動もかかわっている。心の教育を行ってきた3人のOVを紹介する。

内戦下に始まった
スリランカ野球の歴史

協力隊のスリランカ派遣が始まって今年で40年。その特徴の一つに、26年間続いた内戦下においても隊員の派遣が継続され、内戦終結後も民族融和や紛争影響地の復興にかかわってきたことが挙げられる。

「町中には機関銃を持った兵士が警備に立ち、任期中にも自爆テロがありました。地方に移動する列車は特に危ないというので、JICAから乗車禁止となっていました」と振り返るのは、2002年に初代野球隊員として赴任した植田一久さんだ。その年2月に一旦は政府と反政府組織の間で停戦合意がなされたものの、内戦は再燃し09年

まで続くことになる。そんな時代にスリランカでの野球の普及は始まった。現在、スリランカは西アジアアカップで優勝を取るなど野球強豪国である。しかし植田さんの派遣当時、野球はクリケットやバレーボールの人気に到底及ばない「超がつくマイナースポーツ」。植田さんは野球チームがある学校8校(コロンボ4校、キャンディ、ゴール各2校)で主に高校生を対象に巡回指導を行ったが、「用具はポロポロで、ボールは1校に1つか2つある程度。やっている内容も遊びの延長のような状態でした」。

日本からの支援で用具を調達し、準備運動やキャッチボールのやり方から少しずつ技術指導を始めた植田さんだが、特に力を入れたのが「心の面の指導」だった。

「野球はチームメイトがいて、相手チームがいて、審判員がいて成り立つスポーツです。あらゆる人に対するリスペクトが大切だということを最初に伝えました」

巡回指導に加えて野球の普及にも注力し、地方での野球教室キャラバンを企画・実施。指導者・審判員育成のための講習会の開催にも取り組んだ。

「野球の認知度を上げるため、ユニフォームを着て、グローブとボールを持ち、バットを担いで町中を歩いたこ

球は大きく花を咲かせた。「赴任期間中はまだ内戦下でしたが、チームにはシンハラ人もタミル人もおり、子どもたちの間に民族による対立は感じませんでした。『野球の好きなところは、公平に打順が回ってくるし、誰でもヒーローになるチャンスがあるところ。野球はみんなに平等だから』という子どもたちの言葉が印象に残っています」

2つの民族をつないだ
音楽の絆

09年の内戦終結後には、長年対立してきたシンハラ人とタミル人の「民族

融和」が大きな課題になった。協力隊もスポーツや音楽を通してその支援に取り組んできた。その一例が、現地で民族融和を念頭にいた音楽交流プロジェクトを行うNGO「The Music Project」に派遣された音楽隊員の活動だ。

「シンハラ人が多く住む南部のクルネーガラ県の3校と、タミル人が住む北部のムライティブ県の2校、計5校の11〜14歳の生徒を対象に、各校週2回、放課後の音楽指導を行うとともに、学校の長期休暇を利用して南部と北部の学校の交流プログラムを実施しました」と話すのは、14年に同NGOに着任した林加菜さん。放課後の音楽指導



2012年12月23日には「スリランカ・日本フレンドシップ野球場」が完成。この写真を提供してくれたスージー・ウィジャヤナーヤカさんは、植田さんの教え子で、日本で審判の資格を取得した

ともありました」と笑う植田さん。派遣期間の終わりには、野球チームのある学校は約30校に増え、大学にも1チームできていた。

その後、現在まで野球隊員の派遣は継続されており、09年のアジアアカップでナショナルチームが銅メダルを獲得し、16年には西アジアアカップで初優勝。その間の12年にはスリランカ初の野球専用球場が外務省・草の根文化無償資金協力とJICA寄附金を利用して建設され、この球場で19年に開催された西アジアアカップでも再び優勝を手にした。また、1校から始まった大学野球も現在はリーグ戦が行われるようになり、社会人リーグでは陸海空軍のチームが活躍している。協力隊の野球隊員が種をまき、育ててきたスリランカ野

では、他の職員とともにリコーダーや管楽器、ピアノ、バイオリン、打楽器などの演奏と合奏の指導に取り組んだ。

「派遣当時、子どもたちはリコーダーで簡単な曲が吹けていましたが、楽譜を読むのはまだ難しい様子でした。そこで次の段階として、楽譜が読めるようになることを目標にしました」と話す林さん。伝統音楽が主流のスリランカでは、五線譜を使う西洋音楽の基礎がなく、苦勞も多かったというが、「子どもたちに興味をもって楽しんでもらうために、スリランカ音楽を五線譜に起こして取り入れるなど工夫をしました」という。

活動の舞台裏

物を大切にする精神

野球の技術指導とともに植田さんが生徒たちに伝えてきたのは、物を大切にする精神だ。「野球道具は丁寧に扱い、使ったら片づける」と繰り返し伝えた。ある日、1個しかないボールがジャングルに入ってしまった。生徒たちが必死で探したが、見つからない。そこで植田さんは新しいボールを渡して帰った。



コロンボ島から始まったスリランカ野球の歴史は、現在地方へも広がり、スリランカの野球人口は増え続けている(写真は2015年)

ところが、次に植田さんが指導に行くと、先日渡した新しいボールがポロポロになっていた。生徒の一人がうなだれながら「毎日洗っていたら革がポロポロ剥けてきて……」と報告にきた。硬式ボールは革製品だから、水で洗わずにタオルなどで拭いて手入れをするが、植田さんはそれを伝え忘れていたのだ。「僕の失敗でしたが、生徒たちが物を大切にしようとしてくれたことがわかり、うれしい記憶として残っています」。



庶民の台所、地元の人で賑わう市場

スランガニでは、歴代の協力隊員たちも活動している。同NGOでは、スリランカの貧困地区の幼児教育や健康診断にも力を入れている



ばばしげこ
馬場繁子さん

幼稚園教諭/1986年度3次隊・東京都出身

PROFILE

NGOスランガニ代表。幼稚園教諭としてネパールでボランティアに携わった後、1987年に協力隊に参加し、スリランカで幼児教育活動に従事。帰国後、92年にNGOスランガニを設立。現在スリランカに在住し、障がいを持つ子どもたちや貧困家庭の子どもたちへの教育支援などの活動を行う。

活動の舞台裏

あげる精神

林さんが活動していたころ、かかわっていた生徒の家庭のほとんどは裕福とはいえなかった。母親が中東諸国に出稼ぎに出ているといった家庭も多く、子どもたちは年に数回しかない母親の帰国を心待ちにしていた。そうしたなかでもスリランカの人々は宗教、民族、老若男女問わず「あげる精神」が根づいているように感じ、驚いたという。



スリランカでは人口の約7割が仏教徒とされている

「仏教の影響もあってか、特に食べ物に関してはどこにいても大変豪快に振る舞われました。巡回先の学校の子どもたちも、木の実やアメ、シールや髪飾りなど、さまざまなものくれます。独り占めをする様子もあまり見たことがありません。それは一朝一夕で身につくような姿勢ではなく、その精神は人とかがわかるうえで大切にしたい姿勢だと感じました」。

こうした各校での指導をベースに実施されたのが、南部と北部の子どもたちの交流合宿プログラムだ。内戦終結から間もない派遣当初、反政府勢力の拠点だった北部に外国人が入るにはパスポートが必要で、内戦で親や親戚を亡くしたり、手足を失った親を持つ子どもも少なくなかった。そうした状況下で年2回、シンハラ、タミル両民族の子どもと保護者が150〜200名程参加して行われた交流合宿では、合奏の練習と成果発表のコンサートを通して交流を深めることが目的だった。

「しかし、シンハラ人とタミル人は、シンハラ語とタミル語という別の言語を使用しています。学校では習うので、お互いの言語が全く理解できないという訳ではないようでしたが、民族的なことだけでなく思春期特有の照れもあってか、あまり積極的コミュニケーションしない面がありました。親同士もお互いによそよそしい雰囲気がありました」

それが、交流合宿の回を重ねるごとに、少しずつ変わっていったと振り返る。「劇的な変化とは言えませんが、合宿中の練習や遊びを通して子供たち同士が楽しそうに笑い合う姿も増え、両民族の親同士の間の空気が柔らかくなっている感じがありました」

こうした活動の意味について、前出

結ぶことで先生同士のネットワークを広げていきました」

そこでは指導法の共有だけでなく、先生同士の「頼母子講」(※)的な仕組みづくりや食材の共同購入など、先生自身の生活を支え合う活動にもつながった。こうして始まったスランガニの活動は、その後、先生たちのネットワークのなかから浮き彫りになった課題を解決するため、絵本が入った図書箱「アリペンチャ」を配布する絵本箱事業、貧しい家庭の子どもたちへ、毎月一定額の教育費用を送金し、教育資金を支援するプログラム「スマイルズ教育里親事業」、障がい児通所センター「リトル・トゥリー」の設立、落花生を

のクマール名誉教授は次のように評価する。

「反政府組織のテロ活動が活発だった時期には、テロを警戒して人を集めた催しなどできませんでした。実際、コンサート会場が爆破されるテロも起きました。そういうことを恐れず、音楽を楽しめたことは、参加者の心を癒やし、安心感を与えることにつながったように思います」

長年にわたり積み重ねられた草の根からの人づくり

これまで紹介してきたスポーツ隊員や音楽隊員の活動には、それぞれの時代や分野で求められた現地のニーズがあるが、より大きな目で見れば「人づくり」とくくることができようだろう。クマール名誉教授も協力隊に期待することのひとつに「技術的なことはもちろん、仕事に対する責任感、人権や他者を尊重する姿勢など、日本人の良い面を伝えること」を挙げる。

スリランカで「人づくり」に取り組んできたOVの一人が、NGO「スランガニ」を設立して、30年間、幼児教育の支援活動を続けてきた馬場繁子さんだ。もともと幼稚園教諭だった馬場さんは、個人ボランティアとしてネパールで幼児教育に取り組んだ後、1987年に

使ったスナックを製造する食品加工作業訓練センター「リトル・ティーズ」の開設などに広がっていった。

「学用品が用意できない貧しい家庭の子どもが小学校に通えないという話から始まったのがスマイルズ教育里親事業で、リトル・トゥリーも先生たちからの要望がきっかけでした」

馬場さんは、スランガニの30年間の活動を振り返ってこう話す。

「近年は政府も幼児教育に重きを置き始めており、スリランカの幼児教育はずいぶん発展してきたと感じます。協力隊の幼児教育隊員の活動も、さまざまな地域・行政のレベルに広がり、いろいろな角度から幼児教育に対してア

プローチできるようになっています。それはうれしいことです」

今回紹介してきたスリランカでの協力隊の活動は、40年の歴史のほんの一部だが、前出のクマール名誉教授は、協力隊の活動を振り返り「一般のスリランカ人が足を踏み入れないような場所にも分け入って、粘り強く住民の状況改善に取り組む隊員の姿には胸を打たれます」と話す。

こうした声に応え続けていくことは、スリランカ派遣隊員だけでなく、すべての協力隊員に求められていることではないだろうか。

※頼母子講(たのもしこう)：地域の個人や仲間内などでお金や米を出し合い、融通し合う民間の互助的金融組織。日本では鎌倉時代からあったとされる。

専門家に聞きました！ 失敗に学ぶ 現地で役立つ人間関係のコツ



今月の教える人 久保田真弓さん(旧姓 田村)

ガーナ/理数科教師/1980年度1次隊・神奈川県出身
関西大学総合情報学部教授。インディアナ大学スピーチ・コミュニケーション研究科で博士号取得。専門はコミュニケーション学、非言語コミュニケーション。国際理解教育のサポートを行う関西大学の学生団体「Meet the GLOBE」のプロジェクトでは、日本の小学生や高校生と現地の協力隊員との交流を図る。

今月のお悩み

「ためになる研修会を企画しても
弁当を配ったり
食べ物の提供がないと
参加してもらえませんでした。」

(マラウイ/青少年活動/女性)

小学校で、児童たちに図工や音楽などを教えていました。マラウイでは情操教育科目が定着していなかったため、教員向けに授業の進め方などの研修会を企画しましたが、参加者があまり集まりませんでした。

マラウイには「アローワンス(口豆)文化」があり、主催者側が参加者にお金を包んだり、食事や飲み物(1)フレッシュユメン

小学校で、児童たちに図工や音楽などを用意したりしても、なすのトを、それがないと参加しないというのです。

日本では、自分の知識を増やしたいと、参加者側がセミナー料を支払ってでも受講するので、意欲の低さに戸惑いました。

マラウイや食事を用意する予算がなく、開催を諦めざるを得ないこともありました。どうしたらよかったですか。

久保田先生からのアドバイス

同じ目線に立って、
やりたいことやできないことを
相手に伝えてみましょう。

「弁当については、マラウイに限らず、多くの協力隊員が悩んできたことだと思います。」

「前号では、自分を「現地化」することをお勧めしましたが、このお悩みに関しては、まずは「現地化」した目線で考えてみましょう。」

「読者の皆さんは、なぜ多くの地域で主催者側がお金や食べ物を用意する慣習があるかわかりますか？ 考えられる一番の理由は「現地の人の収入が少ないから」です。」

「研修は1〜2時間で終わったとしても、交通機関が発達していない地域では、研修場所への移動で1日使うこともあり得ます。その間仕事ができませんが、収入が減ってしまいます。家が遠く、研修会場に来るのに飛行機を使わなくてはならなければ、金銭面で大きな負担です。」

「つまり、補填するお金をもらわなければ、参加したい気持ちはあっても、参加できないという

事情があります。

「研修会で出された食事がその日の一食目の方や、その場で食べずに家に持ち帰って、家族に食べさせたりする方もいるかもしれません。お金がない方でも参加してほしいという気持ちがあるから、主催者側はお金を包んだり、食事を用意したりしても、なすのではありませんか。」

「一方でこうした任地の事情は理解していても、協力隊員が大盤振る舞いできる予算を持っているわけではないので、在外事務所に現地業務費を申請するとしても、毎回は難しいでしょう。では、予算がなければ開催を諦めるしかないのでしょうか。」

「私からの提案は、会に参加するメリットと、こちらの事情を正直に伝えることです。同僚の教員への参加を促す会なら、初対面でない教員もいるでしょうから、例えば、「この研修会に参加してもらったらこんな力が身に付くのであなたに参加してほしい

か」と思っている。ただ、私たちに

「は予算がないので、今回は飲み物だけは用意できるけれど、食べ物を持ち寄りにしたいのだけどう思う？」と状況を伝えて相談します。」

「最初は少人数の会でもいいでしょう。持ち寄りにすること、自分の分だけでなく、少し多めに持ってきてくれる人が出てくるかもしれない。その研修会が最終的に給料アップも目指せる力が付くとすれば、口コミで広まり、徐々に飲み物だけでも参加したいという人たちも現れるはずですよ。」

「お金や食べ物以外の付加価値を付ける方法もあります。フィリピンでは、「サティフィケート(修了証や免許状)」をもらえるが、会への参加を決める判断材料という人も少なくありません。そうした国なら、カウンターと相談して、研修会が終わったときに修了証のようなものを発行するのも有効でしょう。」

- POINT**
- 会に参加するメリットを明確に伝える
 - できること、できないことを相談する
 - 最初から大規模な会を目指さない



この職種先輩隊員に注目!

～現場で見つけた仕事図鑑



TLMsのカードを並べ替え、キーボードの並び順を覚える生徒たち

PC インストラクター

分類：人的資源

PCの基礎知識・基本操作の指導、PCのメンテナンス・環境整備などの支援

派遣中：8人(累計：537人)

類似職種：コンピュータ技術、コミュニティ開発、青少年活動、デザイン、映像など

※人数は2021年9月末現在。

#0004



ルワンダでもセルビアでも、礼儀作法も含めた空手道の普及活動を進める

空手道

分類：人的資源

空手や空手道の根底にある精神や文化の指導、指導者に対し指導方法を伝授する。

派遣中：1人(累計：114人)

類似職種：体育、合気道、青少年活動など

※人数は2021年9月末現在。

#0003

Q 現在のセルビアでの活動は?

ナショナルチームとクラブ(道場)の生徒への指導です。各国のナショナル選手を集めてトレーニングキャンプを実施するなどセルビアの空手のレベルは高く、東京2020オリンピックでは金メダリストを輩出しました。セルビア人のコーチも多くいるなかであえて日本人による指導を要請したのは、日本へのリスペクトがあるのではないかと感じています。流派が私とは異なるため、技や形を深く指導することはできませんが、礼儀作法や基本練習を通じて空手道の精神を伝えたいと取り組んでいます。

Q 16年のルワンダでの活動は?

要請内容はセルビアと同じですが、空手を取り巻く環境はかなり違いました。ルワンダでは空手人口はまだ少なく、ナショナル選手の指導とあわせて各地の学校で空手を紹介する普及活動も実施しました。動画を見せて空手がどのようなスポーツなのか知ってもらうところから始めることもありました。ろう学校に着任した隊員が手話もできたので、協力して聴覚障害のある子どもたちに空手を教える活動も行いました。普段より表情や動作

を大きくして伝えることを心掛けた。回を重ねることに上達し、空手を楽しんでいる姿が印象に残っています。

Q 活動での最大の困難は?

言葉です。英語が通じたルワンダと違い、セルビアでは大人でも英語がまったく通じないため、スマホの翻訳アプリを駆使してコミュニケーションを取っています。さらに新型コロナウイルス感染拡大後は、道場が使えなくなった時期もあり、活動が制限されています。空手は相手あってですから、思いどおりに指導できずに悔しい思いもしています。

Q 工夫していることは?

スポーツ全般、動きを見せたほうが伝わりやすいので、日本からビデオカメラと一眼レフ、三脚を持参し、動画で記録を残しています。また、1回目のルワンダ派遣からの帰国後、スポーツ指導者の資格を取得しました。空手道に限らず、スポーツの指導法は、日々アップデートしていくことが大切です。自分のやり方に固執せず、配属先に合ったやり方を模索しています。さらに、勝ちにこだわるだけではなく、空手道の精神を伝えていきたいと思っています。

Q メインの活動は?

配属先は、ガーナの小さな町にある4年制の職業訓練校。1・2年生必修のICT(情報通信技術)授業で1・2年生を担当しました。PCの基本操作を指導することが要請でしたが、1年生約50人、2年生約20人の生徒数に対し、使えるパソコンは3台ほど。私が初代隊員だったため、まずは、訓練校の先生のやり方に倣い、教科書の内容を黒板に書き写し、知識を伝える座学から始めました。その後、JICA事務所からプロジェクトを借りることができたので、PCにつないで実際の画面を見てもらいながら、PCでできること、操作の仕方などを指導していきました。

Q 活動で最大の困難は?

難しかったのはクラスコントロールです。パソコンが3台しかなくPCに直接触れる機会がないうえ、頻繁に停電が起きてプロジェクトが使えないこともあるので、集中力が続かずに居眠りをしたり、関係ないことを話し始めたりする生徒が多かったです。授業は一人で行うことがほとんどだったので、英語で言いたいことがうまく伝えられなかったことも一因だったと思います。

Q 困難を克服するために工夫したことは?

ガーナに派遣されているPC関連の有志で構成する「エレクトロニクス分科会」に参加し、先輩隊員の活動内容やワークショップで得た知識を自分なりにアレンジし、授業に生かしていきました。特に役立ったのがTLMs(※)です。PCがなくともカードを使って「コピー」「貼り付け」などのアイコンをクイズ形式にして覚えたり、キーボードのポスターを使ってタイピングの練習をしたり。熱心な生徒には休み時間にPCの貸し出しも行いました。

Q 同職種を目指す後輩へのメッセージをお願いします。

PC関連の職種であっても、途上国では「電気が通っていない」「PCがない」という状況下で活動しなければならぬことが多々あります。でも、できることは必ずあります。派遣国には先輩隊員やJICAの調整員の人たちがいるので、一人で悩んでも解決しないときは、相談してみるのもいいでしょう。自分では思いつかなかったアイデアを聞けるかもしれない。そして、ときには一息ついて、リラックスすることも忘れずに。

※TLMs…Teaching/Learning Materialsの略で、視覚教材やカードなど、教員が授業で使用する教材のこと

生徒数約70人、使えるPCは3台
授業は試行錯誤の連続でした



森陽子さんの場合
ガーナ/2016年度4次隊

PROFILE

岡山県出身。中学時代に協力隊に興味を持ち、一般企業で営業事務として3~4年勤務した頃「新しいことに挑戦したい」と応募を決定。PCインストラクターとして、ガーナ雇用・労働関係省管轄の職業訓練校に着任。帰国後は、JICA徳島で国際協力推進員として活動中。

由地一樹さんの場合
ルワンダ/2015年度3次隊
セルビア/2019年度2次隊

PROFILE

兵庫県出身。9歳から空手を始める。高校卒業後、一般企業に勤めながら空手指導者として活動。2016年からルワンダ、20年1月からセルビアに赴任。新型コロナウイルス感染拡大のため3月に一時帰国するも12月に再赴任がかない、現在も活動を続けている。



勝ちにこだわるだけではなく
空手道の精神も伝えたい

あって良かったモノ

ルワンダ

泥だらけはNO!



1年たっても無傷な相棒 トレッキングシューズ

おおいしゆうすけ
大石祐助さん ルワンダ／マーケティング／2019年度2次隊・神奈川県出身



任地であるルワンダ東部のルワナマガ郡は停電が少なく、インターネットもつながり、おいしい外食もできる過ごしやすい町です。

配属先のルワマガナ郡庁ビジネス振興課を統括するディレクターと一緒に動き、共同組合の支援や雇用機会の創出の支援をしていくことが、僕の主な活動です。

(コロナ禍の外出規制などが無い) 平時は、組合の人たちとのミーティングがあるため、外出が基本ですが、地域一帯は道の大半が未舗装なので、丈夫な靴が欠かせません。

そんなときの頼もしい相棒が、日本で先輩隊員に勧められて持ってきたトレッキングシューズです。スコール対策も万全で、毎日履いていても無傷です。

一方、地元の人たちの足元を見ると、はだし、サンダル、スニーカー、革靴と多種多様ですが、配属先が省庁ということもあってか、革靴好きが多い印象があります。

道が悪いので底が固くて汚れやすい革靴は適さないと思うのですが、ピカピカに磨いた革靴を履く人ばかりで、最初は驚きました。

足元の話でもわかるとおり、ルワンダの人たちはおしゃれで清潔感がある人が多いです。そのため、僕も身だしなみには日本にいたとき以上に気を使っています。

始業時間が早いのですが、一日中外を歩き回って土ぼこりにまみれたトレッキングシューズで室内に入るのははばかれるので、毎日できるだけ拭いてから活動先へ向かっています。

全然違う!?

東ティモールの ニックネーム事情

アジアで最も若い国、東ティモール。インドネシア東部の島国。

活動先の学校では毎日の授業で出欠を取るたびに生徒の名前を呼んでいた。その数400名以上。それぞれの名前は実に個性的で覚えるのが大変。生徒に教えてもらったり、家では名簿を見て暗記したり、繰り返して毎回の授業で呼んで、生徒たちの

任地の思い出を聞きました。

あの日、

地球の、

あの場所で。

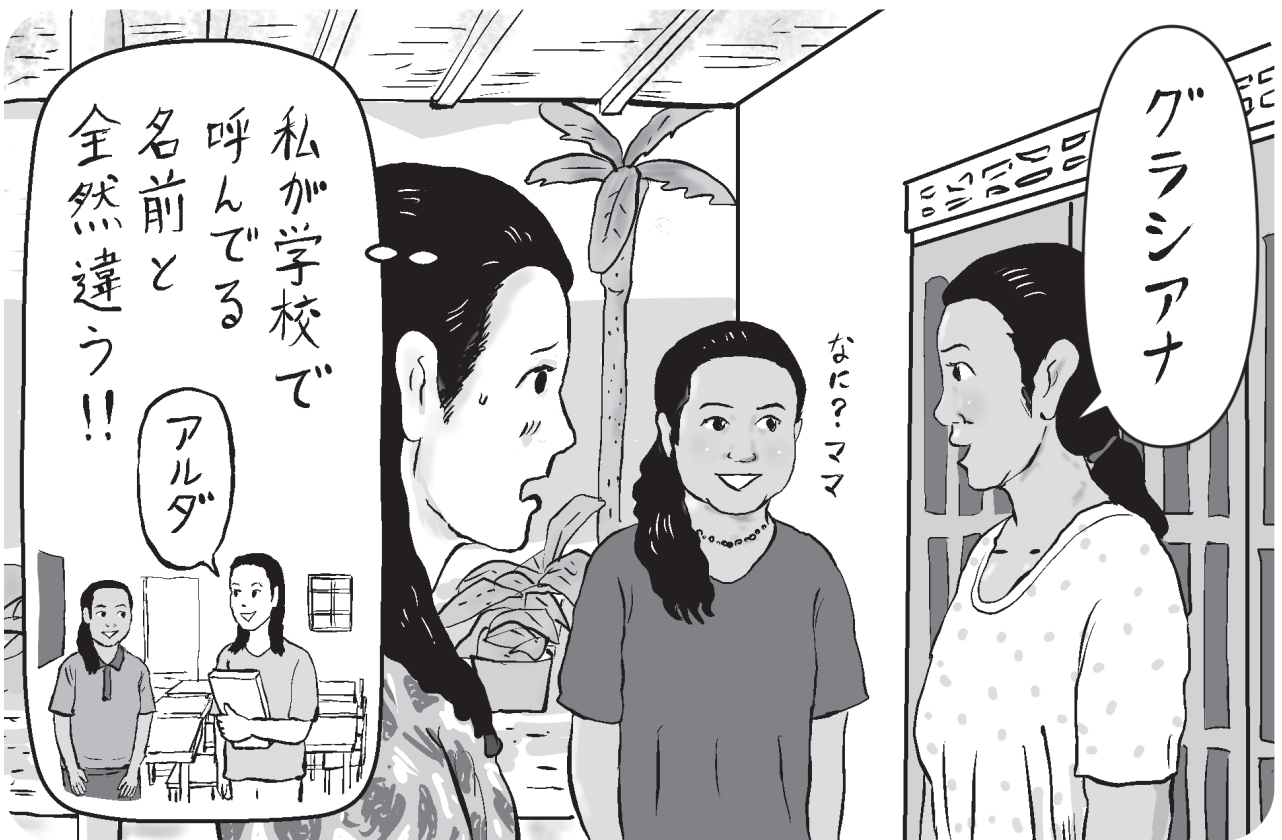


Illustration = 牧野良幸 Text = 浦澤修

名前を意識して覚えるようにしていた。

そうやって、東ティモールに赴任して3カ月がたち、生徒の名前を少しずつ覚え始めてきた頃。大家さんの子どもで私の生徒でもあるアルダがママにこう呼ばれていた。

「グラシアナ！」

—— 一瞬、耳を疑った。

アルダは屈託のない笑顔で「学校では本名のアルダ。家ではニックネームのグラシアナで呼ばれている」と。まさか本名とニックネームがあったなんて。しかも、日本と違って本名とニックネームの関連性はゼロ。例えばドミンゴスがミヌになったり。本人が勝手に決めていいのか、つながりはわからないけれど、どちらの名前でも呼ばれるらしい。もしや本名とニックネームを両方覚える必要がある!?

この日の夜からベッドのなかでは800以上の生徒の名前がぐるぐる頭を巡るようになった。

金子琴美さん

東ティモール / 体育

2016年度3次隊・長野県出身

シェーカツ記

帰国後、内定までの
就職活動の方法を聞きました。

協力隊の経験を通じて 行政の役割に 興味を持ちました



今月の先輩

佐賀県庁 県土整備部 佐賀土木事務所
日高沙知さん Sachi Hidaka
ガボン/コミュニティ開発
2015年度1次隊・福岡県出身

就職先：
佐賀県庁



事業概要：各種施策の立案・企画、県財政の管理、公共施設の管理・運営など

日高沙知さんの略歴：

- 1986年 福岡県生まれ
- 2009年 大学卒業後、イオンリテール株式会社入社
- 2015年7月 青年海外協力隊員としてガボンに赴任
- 2017年7月 帰国
- 2018年4月 佐賀県庁入庁。地域交流部に配属
- 2020年4月 県土整備部に配属

JICA海外協力隊ウェブサイト
「帰国隊員の進路開拓についての相談受付」

https://www.jica.go.jp/volunteer/obog/career_support/counselor/

※進路相談の対象は、青年海外協力隊および日系社会青年海外協力隊の経験者のみとなります。※対応可能な日は希望進路の分野によって異なりますので、あらかじめ電話またはメールでのご連絡をお願いします。



日高さんが配属されたリーブルビル零細漁業支援センター（CAPAL）は、日本の水産無償資金協力により2012年に建てられた魚市場だ。しかし着任した当時、利用者はほとんどなく、日本の無償資金協力案件でワースト3に入るとまで言われていた。CAPALの活性化は、ガボン政府、JICAにとっても大きな課題であり、日高さんの活動も、関係省庁、JICA専門家と連携することが多かった。活性化のため、日高さんが取り組んだことの1つが、施設を造花で飾る美化活動や、パンフレットで魅力を伝える広報活動だ。協力隊参加前の職場で、衣料品売り場のマネジメントを担当していた経験も生きた。関係づくりから始め、従業員が率先して掃除をするようになるなど徐々に意識も変わり、仕事への意欲も高くなっていったという。こうした経験を通じて、地域活性化、地方創生における行政の役割に関心を持つようになった日高さんは、帰国後の就職先に佐賀県庁を選んだ。採用面接で念押しのように確認されたのは、県庁で働くことの覚悟だった。

1 協力隊時代 2015年7月～



CAPALで収入向上に貢献した女性たちの表彰式。この笑顔が忘れられない

リーブルビル零細漁業支援センター（CAPAL）は、水揚げした鮮魚の集約や水産物の流通体制の整備を目的に建てられた施設です。施設の運営補助と、鮮魚を販売する女性グループの収入向上が要請内容でしたが、当時は売る人も買う人もほとんどいないという状況でした。まずは、市内の市場で女性に声をかけ、CAPALで試験的に魚を売ってもらうところから活動をスタート。従業員やJICA専門家とも連携することで、最終的には1日の利用者が100人を超えるなど、成果を感じる事ができました。

2 帰国～就職先探し 2017年7月～

帰国するまではアフリカで働きたいという気持ちもあったものの、迷いながらも就職しなければという気持ちから、「PARTNER」で求人を探しました。就職先の条件は、地元の九州であること、地方創生にかかわれること、腰を据えて働けることの3つ。それでヒットしたのが、佐賀県庁でした。2年間の協力隊の活動を通じて、行政の力の重要性を感じていたので、社会人経験者（※）で応募することを決めました。

▶「PARTNER」
3つの条件をキーワードに検索して、求人情報を探しました。

3 第1次試験 8月末

提出書類 ▶ 職歴書 ▶ アピールシート(A4 3枚)

第1次試験は書類選考。アピールシートには、アピールしたい経験と、その経験を通じて得た考え方や行動の変化、さらに、その経験で培った能力を生かして、県職員として取り組みたいことを書くよう求められました。アピールシートは採用側が初めて目にする書類なので、「この人に会いたい」と相手が私に興味を持ってもらえるようにアピールしたい能力を3つに絞って箇条書きにし、論理的に記入しました。

4 第2次試験 10月上旬

内容 ▶ 小論文 ▶ 面接

小論文は、「佐賀県の『強み』、『弱み』について挙げたうえで、佐賀県の今後の発展の方向性について論じる」というのがテーマでした。面接では協力隊での活動について聞かれることはあまりなく、前職の民間企業での職務内容や人間関係について聞かれたことを覚えています。

5 第3次試験 11月上旬

内容 ▶ 面接

最初の10分がプレゼンテーション。テーマは「私が社会人経験で培った能力」。面接では、「堅い仕事だけ大丈夫？」と、仕事に対する覚悟を繰り返し聞かれたことが印象に残っています。

2017年11月末内定、2018年4月1日入庁

Text = 油科真弓 写真提供 = 日高沙知さん

「県庁の仕事は堅いけれど続けられるか」と何度も聞かれました。最初の配属先での仕事は、主に法令や工事契約を取り扱う法務・総務調整だったのですが、今思うと、「確かに堅い」と納得しました」

実際、最初のうちは、これまでやってきた経験を生かせないと葛藤もあったという。それでも、最初の2年間法務・総務調整を担当したことで、行政の仕事の基本が理解できた。

採用面接では協力隊の経験を聞かれることはなかったというが、実際に県職員として働いてみて、経験が役立つていると感じることもある。

「どんな仕事をするにも正解はないし、やり方は一つではない。いろいろな視点を持って仕事に取り組みています。それは、協力隊での経験が大きいと感じています」

現在の仕事

入庁直後は、SAGAサンライズパーク（スポーツ複合施設）整備推進課に配属され、法務・総務調整を担当しました。まさに面接で言われた「堅い仕事」でしたが、行政の仕事の本質を教えられた濃い2年間でもありました。当時の上司に、公務員の仕事は法律がベースにあり、そこから広がっていくと教えられましたが、その言葉の意味もよくわかりました。20年4月からは、土木事務所に配属になり、道路の管理に関する仕事をしています。県民との距離が今までよりも近くなり、県民の生活をサポートしていると実感しています。



佐賀土木事務所にて、道路の審査中の様子。

先輩へメッセージ

帰国後、何をしたいのか悩んでいる人も多いと思いますが、まずは、どういう生き方をしたいのかを考えると仕事を見つけやすいのではないのでしょうか。協力隊の経験は人生の通過点なので、それをこれから、どのように生かしていくかが大切です。協力隊を含め、自分のそれまでの経験を伝えるられるようにすると思います。

※このページで紹介した採用方法は、日高さんのご経験に基づいたもので、現在は採用方法が若干変更されています。

※JICA等における海外ボランティア活動、地域おこし協力隊等の地域貢献活動、スポーツ分野の活動等幅広い分野の様々な活動経験者を対象とした採用枠

岡本さんの歩み

2012年 東京大学文学部を卒業後、大手生命保険会社に就職。営業や人事を担当。



みんなでワイワイするのが好きで、週末は「大人の運動会」といった交流イベントを企画していました。休暇中に旅した途上国の人々のエネルギーに圧倒され、海外に住んでみたいくなりました。



2018年3月、協力隊員としてタンザニアへ。隊員の間で「タンザニア人を引き連れている日本人がいる」と話題になるほど、任地の人気者になった。



村を観察すると、森の奥の方まで薪を拾いに行き炊事をする女性の家事負担が大きいことに気づきました。薪の消費量が少なく安全性も高い改良かまどは、2年で70以上の家庭に広がりました。



2020年3月帰国。世界中の人がコロナ禍でも一体感を感じられるよう、協力隊OVと動画(※)を制作。



協力隊経験を生かしてタンザニアで仕事をしたいと考えるも、コロナ禍で就職活動に苦戦。井崎さん、三戸さんと再会し、起業を模索。9月から東京大学の起業支援プログラムに参加。



隊員活動を通じて、もっと人に力を与えられる生き方をしたいと考えようになったことがきっかけです。



2020年12月、WATATU株式会社設立。タンザニアの農業事業のほか、日本の中小企業の海外進出支援や協力隊隊員の就職支援などを展開。



2022年中に奥さんと子どもと一緒にアフリカへ移住する予定です。



※「世界に届け-Reach the world!! Project」は、「世界を元気づけよう」と岡本さんが声をかけ、76人の帰国隊員が18カ国語の言語で参加し、「STAND BY ME」などのミュージックビデオを作成したプロジェクト。YouTubeチャンネルで公開中。



- ① 隊員時代は、ルバマ州ソングア県で改良かまどの普及に尽力。2年間で70以上の家庭がかまどを作った
- ② 日本とタンザニアをつないだオンラインミーティング。下段左が岡本さん、上段真ん中が三戸勇輝さん(コミュニティ開発/2016年度4次隊)、上段左が井崎 奨さん(体育/2016年度3次隊)
- ③ WATATUで農業パッケージを提供する農家は、タンザニアの仲間から情報を集めて決めている



派遣から始まる未来



進学、非営利団体入職や起業の道を選んだ先輩隊員

▶ WATATU株式会社を起業

岡本龍太さん Ryuta Okamoto
タンザニア/コミュニティ開発 / 2017年度4次隊 / 広島県出身

同じ夢を持つ仲間とともに農家の貧困の連鎖を断ち切る

人口約2000人。電気も水道もないタンザニアの村に赴任し、女性の家事労働改善に努めたいと、改良かまどの普及に尽力した岡本龍太さん。もともと人と接するのが好きで、日本でも仲間の輪をつなげていくタイプだったが、楽観的で人に対して寛容な任地の人々の懐の深さに魅了されたという。「協力隊の経験を生かせるような仕事に就き、タンザニアにもう一度住む」。

任期を終えた2020年3月、そう誓って帰国した岡本さんだったが、新型コロナウイルスの感染拡大により、社会情勢は一変した。自分の経験を生かせるキャリアを模索するもなかなかうまくいかない。思うように動けず、タンザニアへの思いばかりが募っていた岡本さんに一筋の光が差したのは、緊急事態宣言解除の合間を縫ってタンザニア隊員仲間の井崎奨さんと三戸勇輝さんと再会したときだった。

思い出話に花が咲き、2人もタンザニアとかかわり続けるために模索してきたと知った。日本企業で働く井崎さんはタンザニアに太陽光発電設備を設置する計画を立て、三戸さんはタンザニアで日本食レストランを開こうと動いていた時期があった。いずれも実現には至らなかったが、タンザニアへの思いを強く持ち続けていた。

2人との再会から約半年後の20年12月、岡本さんはWATATU株式会社を設立した。取締役に、井崎さんと

三戸さんも名を連ねている。WATATUとはタンザニア語で「3人」の意で、「タンザニアの人と日本人、両者をつなぐ3人目になる」との思いを込めた。

事業内容は、タンザニアの小規模農家へ「農業パッケージ」を提供する課題解決型ビジネス。WATATUは種苗や農機具などの物資、生産管理方法や栽培技術などの知識、販売先ルートの開拓までを「農業パッケージ」として農家に提供し、農家からは土地に根付いた農業のノウハウと労働力を提供してもらおう。高く売れる作物を育てられるよう継続的にサポートすることで、収穫量の増大と収入増につなげる。

事業のもとになったのは、三戸さんの経験にある。かつて三戸さんは、稲作で収入を増やしたいというタンザニアの友人を応援するため、数万円を提供した。その友人は受けた資金を元手に土地や資材を買い、肥料や草刈りなどの手入れに力を入れた。そして2年後、米の収穫量と収益の大幅アップが実現した。友人は、将来は村に診療所や農業資材の店を造り、地域の人々を支えたいと考えるまでになった。

彼を信じて託して良かった、と振り返る三戸さんの話をヒントに「事業として発展させれば、もっと多くの人が豊かになれるはず」と考えた岡本さんは、東京大学の起業支援プログラムに参加し、事業化に向けた策を練った。

タンザニアでは労働者の約7割が農業を営んでいるが、その多くは家族の食べる分を作り余った分を売るといふ小規模農家だ。銀行から融資が受けられないためにまともな農業ができず、収穫量や収益は上がらない。収益が上がらなければ、質量ともに十分な資材を買うことができず、また収穫量が下がるという貧困のスパイラルに陥る。

「農業を軸に、ビジネスとして、負の連鎖を断つ。それを目指しています。批判的な意見や厳しい声もありますが、成功を信じています」

協力隊で培った現場経験を生かし、一丸となってタンザニアの小規模農家の課題に応える。WATATUのチャレンジは、タンザニアの農業に新風を吹き込む可能性を秘めている。



待ってます、あなたを！
各界からのエール

From
公益財団法人 日本YMCA同盟

夏に開催しているYMCAキャンプの様子。YMCAでは、子どもの体験学習を成長に欠かせないものとして大切にしている

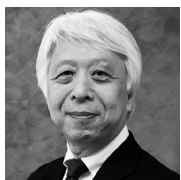


途上国の経験と課題解決のチカラを
これからの日本に生かしてください

YMCAは世界120の国と地域に会員を有するNGOです。日本では、「子育てと子育て」「ユースエンパワーメント」(※)「生活クオリティの向上」「社会に貢献」の4領域で、幼児から高齢者まで一人ひとりのニーズに合わせたプログラムを提供しています。

JICA海外協力隊の皆さんとは、日頃から協働する機会が多く、深いつながりを感じています。例えば、横浜YMCAが立ち上げた多文化共生を推進する保育園では、協力隊OGの保育士を採用しました。日本で暮らす外国人親子の困り事に寄り添い、多様性にあふれた園を作りあげていくために、途上国で暮らした経験や課題解決の力を生かしてほしいと考えたからです。また、横浜AIDS市民活動センターでは、ガーナでHIV/エイズの予防啓発に尽力したOGが活躍しています。他にも多くのOB・OGが、YMCAを通して日本の地域社会に貢献しています。

貧富の格差や紛争の不条理など世界の深刻な課題を目の当たりにし、ショックを受ける協力隊員も少なくないと思います。どうか帰国後も派遣国とのつながりを持ち続け、往來が困難な時代こそ、IT技術を活用して日本と世界と地域をつないでほしい。そしてすべての人が健康で幸福を感じられる、これからの多文化共生社会、この創出にチャレンジしてほしいと思います。



田口 努さん

公益財団法人日本YMCA同盟 総理事／代表理事

たぐちつとむ ● 福島県いわき市出身。東北福祉大学在学中、仙台YMCA主催の障害児キャンプに携わる。1979年、横浜YMCAへ入職。2020年4月に日本YMCA同盟総理事に就任。

※18歳～35歳までのユースが権利主体として、自分たちの内なるパワーや可能性に気づき、主体的に行動していくことや、そのためのプロセス

＼ うちのこだわり /

OB・OG ショップ

— 国内編 —



生で食べられる甘みの強いとうもろこし。冷やしてかぶりつくとシャキシャキとした食感が楽しめる。「野菜の力を引き出すためにも常に新しい栽培法を模索しています」と語る上野さん(右から2番目)とご家族

フルーツとうもろこしや市田柿など 「強みのある農産物」で理想の農業を実現中

パラグアイの農村部で野菜隊員として活動した経験などから、農業をするなら「生産から販売までを手掛けたかった」という上野さん。就農するにあたって重視したのは、消費者に喜ばれる農産物を栽培し、直接販売できる環境だった。

「関東圏の自治体をいくつか見学しましたが『指定野菜を栽培する』『販売は農協を通す』などの制約がありました。それに対して飯田市の人々はおおらかで閉鎖性を感じさせず、ここならやりたい農業が実現できそうだったのです」。

地元の地名「虎岩」から名付けた農園は17年目を迎え、栽培品目もフルーツとうもろこし、市田柿、コメ、原木キノコと年々増えてきた。近年はジュースなどの加工品作りにも取り組んでいる。

「新規就農を目指す人へのアドバイスと

しては、天候に負けないためにも『もうかる作物』を選ぶことが大切です。たとえばフルーツとうもろこしは収穫後、時間単位で甘味が減っていくので鮮度が重要な野菜です。スーパーに並ぶまで数日かかることもありますが、直販すれば翌日には消費者へ届けられます。送料などの経費を差し引いても十分な収入を得ることができます。もう一つの看板商品の市田柿は地域独自のブランド干し柿で、高齢化を理由に生産をやめる農家も多いが、需要が高いため安定した収入源になっているという。「農家は収入が多くなっても、食の面でも住環境の面でも豊かに暮らせませす。新しい就農者が地域に入ると地域が活性化するでしょうし、人々が親身に応援してくれる地域もあるので、若い人にもぜひ目指してほしいですね」。

霧深い気候で
もっちり、ねっとり
甘〜い干し柿に



SHOP DATA

信州の四季をお届けする
虎岩旬菜園

経営者：上野真司さん

パラグアイ/野菜/2000年度2次隊・東京都出身
ウェブショップ <http://www.syunsaien.com/>
所在地：長野県飯田市虎岩1051



Tex = 村重真紀 写真提供 = 虎岩旬菜園

現在の派遣国数

27カ国

JICA 海外協力隊派遣現況

(2021年9月末現在)



(単位:人)

■ アフリカ地域

国名	一般	シニア
ウガンダ	8	
ガーナ	8	
ガボン	11	2
カメルーン	1	
ケニア	6	
ザンビア	2	1
ジンバブエ	10	
ナミビア	7	
マダガスカル	8	
マラウイ	12	
南アフリカ共和国	2	
ルワンダ	16	

■ アジア地域

国名	一般	シニア
ウズベキスタン	1	
カンボジア	8	
キルギス	1	
スリランカ	2	
タイ	1	
タジキスタン		1
中華人民共和国	2	
ブータン	3	
ベトナム	6	
ラオス	20	3

■ 欧州地域

国名	一般	シニア
セルビア	4	

■ 中東地域

国名	一般	シニア
エジプト	4	
チュニジア	1	
ヨルダン	3	

■ 中南米地域

国名	一般	シニア	日系一般	日系シニア
ドミニカ共和国	8		4	

■ 合計

	一般	シニア	日系一般	日系シニア	小計
派遣中 (男性/女性)	155 (73/82)	7 (2/5)	4 (2/2)	0	166 (77/89)
累計 (男性/女性)	45,891 (24,355/21,536)	6,559 (5,300/1,259)	1,543 (597/946)	547 (252/295)	54,540 (30,504/24,036)

一般 = 青年海外協力隊/海外協力隊

シニア = シニア海外協力隊

日系一般 = 日系社会青年海外協力隊/日系社会海外協力隊

日系シニア = 日系社会シニア海外協力隊

INFORMATION

JICA青年海外協力隊事務局からのお知らせ

PROGRAM

JICA海外協力隊経験者も出演する ミニテレビ番組が放送開始

主に国内で活躍する人物にスポットを当て、その人の人生を大きく変えた原体験 (=My Episode 0) をたどり、未来へ向けたメッセージを発信していく「挑戦者の原点～My Episode 0～」が、テレビ朝日で10月2日(土)よりスタートしました。放送日は毎週土曜午前9時55分～10時00分で全25回(関東ローカル)。JICA海外協力隊経験者6名も出演します。ぜひご覧ください。

<https://www.tv-asahi.co.jp/myepisode0/?pa=post>



COMICS

漫画コンペで最優秀賞受賞の 『エブリシング イズ グッド!』がコミック動画化

ガーナの盲学校で障害児・者支援隊員としてブラインドサッカーの普及に努めた羽立大介さん(2018年度1次隊、現広島県国際協力推進員)。彼のエピソードを描き、JICAとWEB漫画サイト「コミチ」が協同企画した漫画コンペで最優秀賞受賞作品に輝いた『エブリシング イズ グッド!』が、「盲学校が舞台の漫画が、視覚障害者に伝わらないままでは寂しい」との羽立さんの思いから、音声解説付きのコミック動画になりました。

また動画化の完成を機に、元サッカー日本代表で積極的に障害者支援にかかわっている巻誠一郎さんとの対談が実現。コミック動画と対談の様子は以下のリンクからご覧ください。

<https://getnavi.jp/world/638844/>



NEWS

スリランカへの派遣が再開

2年4カ月ぶりにJICA海外協力隊2名(小玉和音さん/野球、久保治代さん/音楽)がスリランカに派遣されました。同国では2019年に起きたテロ事案と、その後の新型コロナウイルスの世界的感染拡大の影響で、協力隊の派遣が停止となっていました。

両名は、自己隔離期間などを経て8月31日にスリランカの恒例行事である配属先への隊員引き渡し式にオンラインで参加。それぞれの配属先の代表者に向けて活動への意気込みと感謝の意を述べ、配属先からは激励の言葉をいただきました。

スリランカは1981年に青年海外協力隊の派遣が開始されて以来今年で40周年を迎え、延べ1,151名(2021年9月末現在)の隊員が派遣されています。

NEWS

2021年度3次隊の派遣前訓練が開始

9月8日、2021年度3次隊の入所式が二本松訓練所と駒ヶ根訓練所で行われました。

二本松訓練所では、候補生34人が入所。候補生代表として宣誓したマラウイ派遣予定の新田唯奈さん(福島県出身)は、「互いに助け合い、活動に欠かせない知識を身につけ、全員が隊員の一步を踏み出せるよう努める」と誓いました。

また駒ヶ根訓練所では、候補生28人が入所。候補生代表として宣誓したガボン派遣予定の下村幸さん(長野県出身)は、1年待っての訓練参加。「やっとスタート地点に立てた」と思いを語り、「厳しい訓練に真摯に取り組み、海外協力の現場に飛び立てるよう精進したい」と誓いました。

クロスロード [2021年11月号]

第57巻第10号 通巻672号
発行日 2021(令和3)年11月1日

編集・発行: 独立行政法人国際協力機構
青年海外協力隊事務局
〒100-0004 東京都千代田区大手町1-4-1 竹橋合同ビル

制作協力: 一般社団法人協力隊を育てる会『クロスロード』編集室
〒101-0052 東京都千代田区神田小川町3-28-7 昇龍館ビル2階
ロゴタイプデザイン・誌面デザイン: (株)AND
印刷・製本: 弘報印刷(株) 校正: 佐藤智也

『クロスロード』(通常号)は、
JICA海外協力隊のウェブサイト
でも公開しています。



本誌へのご意見・ご感想をお聞かせください。
アイデアも大募集中です。

今月号の『クロスロード』はいかがでしたか。ぜひご意見やご感想を編集室のメールにお寄せください。「こんな記事があれば活動先で役立つのに」「こんな記事なら読みたい」といったご要望やアイデアも随時募集しています。

『クロスロード』編集室
crossroads@sojocv.or.jp



編集後記

JICA事務局: 活動に行き詰まる度に、別任地で同様の取り組みをしている同期隊員によく相談しました。場所は違っても一緒に取り組んでいる気持ちになり、心強かったことを思い出します。隊員同士の繋がりと『クロスロード』はお悩み解決の糸口に。(脇田雄気)

クロスロード編集室: 特集で青年海外協力隊環境教育OV会の皆さまへアンケートを実施。ざっくり記載してくださる方が多く、2年間の活動で味わった挫折や充実感、後輩たちへ引き継ぎたい思いが詰まっていました。この場を借りて御礼申し上げます。(干川美奈子)

隊員めし

現地で作った日本食、
日本で作る現地めし

サモア

ゆにつけて漬けにする

④溶いた卵を油を引いたフライパンに広げ、焦げないように薄く焼く(ひっくり返す際はフライパンに蓋をしてひっくり返し、蓋に載った薄焼き卵をフライパンにスライドさせると破れにくい。やけどに注意)

⑤焼きあがった卵は温度が下がってから、幅をそろえて折り返し、できるだけ細く切る

⑥焼きあがった米に酢をまぶしながら混ぜて、冷ましておく

⑦アボカドをマグロと同じくらいのサイズになるように切る。キュウリは斜め切りにする

⑧ご飯の上に卵、漬けマグロ、アボカド、キュウリをのせて飾りつける。好みでしょうゆを垂らしてもよい

●レシピ

①マグロをサイコロ状に切って、塩をまぶして余分な水分を出す

②ニンニク、ショウガをすりおろす

③②と調味料(材料欄に記載したコチュジャンから下すべて)を混ぜ合わせ、タレを作る

④マグロの塩を洗い流し、水分をとってからタレに入れて混ぜ合わせる

●材料(2人分)

米……………1合(炊きあがり300g)
酢……………大さじ1
マグロ……………200g
塩……………適量
アボカド……………1個
キュウリ……………1本
卵……………2個
油……………適量
しょうゆ……………適量

●レシピ

①マグロをサイコロ状に切って、臭み消しとうま味を出すために塩をまぶす

②米を普段より少なめの水で炊く

③マグロから水分が出てきたら、塩を洗い流し、水気を切ってからしょう

●材料(2人前)

マグロ……………150g
ニンニク……………1片
ショウガ……………1片
塩……………適量
コチュジャン……………小さじ1
砂糖……………小さじ5
みりん……………小さじ1
しょうゆ……………小さじ4
ごま油……………小さじ1/2

※味付けはお好みで濃さを調整してください



原 奈央さん

サモア/小学校教育/
2018年度3次隊・和歌山県出身
(現・JICA和歌山デスク国際協力推進員)

現地で作った 日本食

「ちらし寿司」

私が接したサモアの人々は食に保守的。食べ慣れないものには手を出さない人が多かったように思います。主食の多くはバナナやタロイモで、米もそれほど食べているわけでもなかったのですが、「スシ」は有名なことと、サモアの人たちが大好きなマグロを使っているの、具材をご飯の上に見えるようにのせてちらし寿司を作りました。サモア料理には酸っぱいものがないので、私は酢飯の酢は少量にして砂糖などの甘味はくわえませんでした。他に、ホームステイ先の子どもたちと一緒に巻き寿司を作りました。具材にはやはりサモアの人になじみのあるツナマヨネーズ、キュウリ、卵を入れました。粉末の酢飯の素を使う隊員もいました。

日本で作る 現地めし

「ポケ(マグロの漬け)」

材料を混ぜるだけでできるポケは、サモアではレストランで提供されるメニューで、お酒にもご飯にも合うと思います。サモアは生魚を食べる習慣があるので、スーパーでは生食用の魚が手に入ります。家庭料理では、日曜日に教会に行った後に食べることの多い「オカ」という料理にも生魚を使います。オカも調理は簡単で、搾りたてのココナツミルクに絞ったレモンと塩を入れて味を調べ、サイコロ状に切った生食用の白身魚、キュウリ、トマトを入れて混ぜて完成します。とはいえ、オカのポイントはフレッシュなココナツミルク。サモアに行って食べて欲しい一皿です。

ホームステイ先の食生活は？

ホームステイ先は10人家族でしたが、食事は家族一緒には食べません。サモアでは年功序列の文化があり、私のホームステイ先家族の場合は、いちばん上になるお父さんとお母さんが別室で食べ、その他の家族は食卓で順番に食事を取っていました。サモアでは調理の味付けの基本は塩としょうゆです。主食のタロイモのほか、バナナなどは家庭で採れるものを使って、肉や魚は

お店で買っていました。缶詰もよく使います。ツナが定番でしたが、便利だと思ったのがトマトとサバの水煮が一緒になった缶詰です。これを温めてご飯にかけるだけで立派な一食になります。ただしこの缶詰を使って私が料理を作ると、いまいちおいしくできません。サモアのお母さんたちが作るとおいしいのに、どうして？というも不思議でした。



家族限定のフリーバナナ

具材を見せてカラフルに
まぐるっぱいの
「ちらし寿司」

料理下手でも
混ぜるだけでできる
「ポケ」



子どもたちと巻き寿司作り



サモアで作ったちらし寿司、おにぎり、漬物



ホームステイ先の家族と



バングラデシュ

ノクシカタを作る村の女性たち。「私たちは日本に行けないけれど、商品を日本人が買ってくれることで世界とつながれる。それが彼女たちのプライドでありモチベーションにもなっている」

母から娘へと受け継がれる 伝統的な刺しゅう技術「ノクシカタ」

かつては使い古したサリー（民族衣装）を重ね、その糸を抜いて刺しゅうしていたというバングラデシュの手刺しゅう「ノクシカタ」。「一針一針刺す手刺しゅうは気の遠くなるほどの時間がかかります。写真もない時代、家族の思い出を刺しゅうした布をお嫁に行く娘に持たせる習慣があり、そうして伝統が受け継がれてきました」と語るのは、バングラデシュOVの松本智子さんと佐藤奈保子さんだ。

1981年、松本さんは初の農村女性隊員として派遣され、任地で経済的に困窮した女性たちを目にした。ノクシカタ刺しゅうが作られる地域だったので、家政隊員とともに刺しゅう製品作りで生活の向上を図った。数人の隊員が活動を継続し、帰国後もその支援が続けられるようにと、96年に有志によって日本・バングラデシュ文化交流会が設立された。

現在は、現地スタッフが中心となり、約

120人の刺しゅう生産者を支えるために活動を継続している。刺しゅうだけでなく、デザイン、布への転写、洗濯、縫製も大変だが、品質管理を徹底している。

「コロナ禍で販売の機会が減っていますが、現地女性の収入に結びつけながら、素晴らしい伝統を残したいと思います。今では母親の仕事をそばで見ていた2代目の生産者が育っています」（松本さん）

同じ色の糸を使っても、若い世代は配色センスが一味違う。「自分で配色を考えながら楽しんで作ることでいいものが仕上がるので、生産者に色の使い方を指定することはありません。1つのモチーフの途中で糸の色を変えたりと、日本人の感覚とは異なる味わいが魅力です」（佐藤さん）。

一針一針、
愛情込めて



＼ うちのこだわり /

OB・OG ショップ

— 海外編 —



日本・バングラデシュ文化交流会理事長の松本智子さん(写真左)と、運営委員の佐藤奈保子さん(手工芸/1986年度3次隊・東京都出身)

SHOP DATA

日本・バングラデシュ文化交流会
H&T (Handicraft & Tailoring)

経営者：松本智子さん
バングラデシュ/野菜/
1981年度2次隊・福島県出身
ウェブショップ <https://jbceaht.handcrafted.jp>



Text = 村重真紀 写真提供 = 日本・バングラデシュ文化交流会

